

箱根駅伝のコンテンツ化と弊害

秋元 美宙

一地方大会に過ぎない箱根駅伝が、なぜこれほどまでに注目を浴びるのか。本論文では、箱根駅伝はメディアの介入によって、「作り込まれた感動ソフト」として「学生スポーツイベント」の枠を超え、「コンテンツ化」されているとする。これにより、視聴者を獲得する為にドラマ性、娯楽性を追求して報道し、高い注目度を浴びている。しかし、一方ではその報道スタイルによって様々な弊害が生じているのである。

主な内容として第 1 章では、日本のスポーツ報道の変遷と特徴について先行研究から明らかにされていることを述べた。まず、メディアはジャーナリズムの役割を担う責任があり、その責任を担う為に様々な文化活動（とりわけスポーツイベント）の主催や後援を行っている。これは自社の宣伝や媒体の売り上げにもつながり、メディアにとってスポーツイベントは一つの有用なコンテンツである。従って、より多くの視聴者を獲得する為に、スポーツ報道の特徴として、「娯楽性」、「ドラマ性」などを重視する傾向が強い。

それを踏まえて第 2 章では、箱根駅伝とメディアについて概要、歴史、他の駅伝のコース、放送時間などを比較した。他の全国レベルの駅伝とは違い、箱根駅伝は圧倒的な放送時間を持ち、コースも特殊である。このコンディションがドラマ性を生成していく要素となっている。続く第 3 章では、箱根駅伝のアーカイブ映像から、内容、実況、選手のインタビューに焦点を絞り、テキスト分析を行った。その結果、レースを率直に伝えるだけでなく、選手の成長やプライベートな情報などを混ぜ込み、視聴者の興味を引くような「娯楽性」を追求して放送されていることを指摘した。第 4 章ではこれらの内容を踏まえ、インタビュー調査を実施し、日本テレビの中継が始まる前と後の大会の様子、またそれによる弊害について記述した。